

【評】一句目。何も語らぬ姑の目はいたわりの目であろうか。朝寝をした者のとまどいが描けた。二句目。山間の釣り場が想像される。見え隠れする釣人の動き。三句目。北欧は白夜である。まことに明けやすい旅の朝。

◆ 稲畑汀子 選

朝寝せり何も語らぬ姑の目
(西宮市) 黒田 國義

山女釣る人岩になる水になる
(名古屋市) 中野ひろみ

フィヨルドの港に灯あり明易し
(青森市) 奥田 好子

美女なれば曇し曇しといふまじく
(川崎市) 小関 新

風光る唐招提寺までの道
(相模原市) 田中 仁

花葉のちからかきりに夜も匂ふ
(千葉市) 谷川 進治

短夜やいつからいつを眠りしか
(高松市) 飛田 冬子

早よお食べ茄子漬の紺纏せぬ間に
(大阪市) 田島 もり

ほととぎす朝な夕な吐息とも
(国東市) 真城 蘭郷

睡蓮の満開といふ静寂かな
(四国中央市) 豊田みゆき

【評】キリコの優雅な姿は大人にも人気。小南に濡れる長い睫毛も魅力的で、サバンの風土を思ふ涙のようだ。第二首の木の名もおもしろい。なんじやもんじや、なぜだと言いかけていた。第三首の牡丹も時の移ろいか。

型に会ふ
(東京都) 宮田 義昭

マイナバー脇腹に付け赤生は阿蘇のくぼ地に
(直方市) 永井 雅子

濡れて草食む

【評】一席。一匹の水すましのいる今。儼年の時をべて、と読んでよい。二席。「水の」とあったが「に」だろう。「く」も格別。三席。はや一年、まだ一年か。雲の峰の呼吸大きい。十句目。衣だけかえとも実体は変わらず。

◆ 長谷川 權 選

儼年や今一匹の水すまし
(栃木県高根沢町) 大塚 好雄

妻の手を離れて水に冷奴
(会津若松市) 湯田 一秋

雲の峰肺切りしより一年余
(松山市) 河村 章

六月の光の中の二人かな
(川崎市) 池田 功

こんなにも感情的な梅雨人かな
(横浜市) 込宮 正一

短夜やもつ露天湯に人のこゑ
(東京都府中市) 酒井 努

尺蠖に届かぬ空のあるばかり
(尼崎市) はりもどちか

鳥獣虫人に梅雨人りかな
(大田市) 小沢 忍

一日一衰くちなしの花の色
(秋田市) 中村 榮一

改元といふ大いなる更衣
(柳川市) 木下万沙羅

【評】第二首、人の一生の中での三十年という時間の重み。「真面目に生きる」に多様な意味が読めて考えさせられる。第三首「母の日」の一枚の家族写真のような一首。第三首、観光客には人気でも、実際に住む者の複雑な気持ち。

タリシグ中
(広島市) 堀 真希

海の中ウラテは泳ぐふわふわと腕刀系に生きて
(大阪市) 前田真智佳

行きたい

【評】第一句。水族館で、私はたまたま昨日、沼津港深海に凍されたシーラカンスを見た。んな出会いもある。第二句。旧満洲で敗戦を迎え、私は、麦飯ところが粟粥で毎日二句。大量を描いて見事。

◆ 大串 章 選

山椒魚シーラカンスに思い馳す
(横浜市) 守屋 雅

麦飯に戦ひの日の記憶あり
(川崎市) 吉川 淳子

アフリカの砂のひや大西日
(東大阪市) 宗本 智之

ゆつくりと終焉を舞ふ竹落葉
(奈良市) 川崎 和子

滝を撮る時も同じ様なきを
(東京都) 望月 清彦

緑蔭や風一陣の別世界
(船橋市) 斉木 直哉

春の旅地球の中の一人かな
(東京都) 池田 金忌

捨つるもの捨て(涼しき身のほこり
(八王子市) 長尾 博

牡丹咲く人の終りをみどけて
(オランダ) モーレンカンプふゆこ

水替へてはよし垂魚と遊びけり
(糸島市) 藤原 泰子

ことして暇ない
(横浜市) 毛達 明子

麦と米作付け面舞
逆転す麦の補助金手あつきめ
(三重県) 喜多 功

そに

【評】一首目、老いに直面する心細さがつまぐい。二首目、言葉よりも態度表わす。三首目、上田敏訳「なもとは」で始まるW・A・レントの名詩「わすれな

【評】沼田さん。殺風景なビル裏側にどこか人めいた風情の串袋。「頭上」の語が串袋と室外機を巧く結びつけている。長谷川さん。要は眠りに落ちただけなのに余韻は深い。これも取合わせの妙。瓜生さん。「広すぎて」にこもる嘆き。

◆ 高山れおな 選

串袋頭上にあまた室外機
(川崎市) 沼田 廣美

竹婦人ブティックホールに吸い込まる
(福山市) 長谷川 瞳

少子化の空広すぎて五月辰
(直方市) 瓜生 碩昭

草土川をのぼる海光みなみかせ
(東京都) 望月 清彦

老鷺に湖は細波もて応ふ
(鹿児島市) 青野 迎葉

カッパルも底鷺の犬も夕焼くる
(松江市) 三万 元

もつ何も要らぬと母の日の母は
(久喜市) 斎藤 たみ

店頭に名水十色夏めける
(伊万里市) 萩原 豊彦

祖国とはなにが実体雲の峰
(東京都) 野上 卓

鵜飼果つ火の香水の香夜風の香
(岐阜県揖斐川町) 野原 武

き梅花藻
(舞鶴市) 吉富 憲治

柴又に風鈴鳴れば冷酒酌む遅美清と笠簪衆なり
(浜川市) 木暮剛歌人

【評】嶋崎さん、悲しい母の日の記憶を持つ夫に、作者は母でもある。島田さん『金子兜太戦後俳句日記』は今後の兜太論に大事な一冊。引用は1959年永井荷風について。小川さんのAEDからは重松清の連載「ひこばえ」を思った。

殿岡 駿星

川の肥料問屋に勤め、十九歳で自由律俳句を志す。二十四歳の春、三歳下の月島の和裁の師匠萩田静子と恋に落ちた。番頭の嫁は店が決める。夢道は別れを告げたが、静子は量に両手をついてアロポーズ。〈せつなくて量におちる女のなみだを吐るまい〉。二人は箱根の旅館へ。〈総身にルビ一残して一糸もなし〉翌年、静子が妊娠したため祝言をおげるが、店にはれて首になる。その後、銀座でいる二屋の経営にも参加し商才を発揮する。〈みつめをキリシヤの神は知らざりき〉。一九四二年、新興俳句弾圧事件で検察される。〈夜明けの逮捕機に靴下も二枚重ねて妻乱れず〉。静子が差し入れた「紙石板」に〈うごけは寒い〉など三百句をひそかに刻んだ。戦後、夢道は獄中の艱難を口にしながら。〈辛い思ひ出は言わずに妻と温泉壺透明に〉。常に自由を愛する心が根幹にあり、ユーモアに満ちた話をしてくれた。今年四月、私はサロンの仲間と「自由俳句の会」を発会、夢道の人間賛歌を学び新興俳句の詩魂復興への道を探っている。(勝どき書房編集長・作家)

風信

公開講座「朝日歌壇の選者とともに」 8月21日(水) 午後1時半、大阪・中之島フェスティバルタワー内の朝日カルチャーセンター。講師は、馬場あき子さんと高野公彦さん

人。定員80人。事前に作品を募る公開選歌は1人1首、締め切りは7月31日(水)必着。受講料は一般4644円。申し込みや詳細の問い合わせは電話(06・6222・5222)で。

☆印は共選作。掲載作は本社電します。投稿は無地のほかき1表の自作のみ。作品の横に住所

これ以上ごはんを減らすのは悲しい...

佐渡汽船で楽しい船旅を!

佐渡でしかできない! 体験を楽しもう!

NIPPON2019